六　子供の遊び

子どもの遊びは大昔からあったことであろう。ただ、昔は純然たる遊びというよりも遊び自体が生活であったり、生活の中に遊びがあったかもしれない。これから述べるのは大正時代から昭和の始めごろにかけてのものである。子どもの遊びも時代を反映するもので次第に変化して行くものであるが、電波時代といわれる現在では子どもたちの遊びも次第に見られなくなってきた。子どもの遊びはほとんど部落内で行われ遊び場も鎮守、寺等の境内等から山野まで広く使われた。遊びの種類も屋内、屋外に分かれており、鬼ごっこやかくれんぼのような単純なもの、木、竹等で作って遊ぶもの、山や野原に出て食べ物を探すもの、小鳥や昆虫等を捕るもの、魚釣りや魚捕り、スポーツ等遊びの種類は多種多様であり実に豊富であった。昭和の始めごろから紙芝居も田舎までやってくるようになり、米ふくらかし、アルミ等の古金物と朝鮮飴と交換することも楽しみのひとつであった。その他子どもの部落行事的なものについては行事篇に述べている。

1　ねん棒

男児の遊びで山や土手等へ行って木を切り四、五十糎くらいにして先の方をとがらして地面によく突きささるように作る。樫、椎、くぬぎ、ぐみ等を主に使う。二人以上四、五人でするのが普通。順番を

決め負けた者が先に地面に突きさすと次々に突きさしながら相手の棒を倒す。完全に倒せばその棒は倒した者の所有になる。倒すまで何回もゲームは続けられるが、相手の棒を倒そうとして自分の棒を突きそこねて倒れると相手は倒れた棒のそばへ抜いて自分の棒の長さだけ突きとばすことによって相手からとられる。これは三回まで許されるが、三回以内で失敗した場合は倒れた棒は生還する。棒の代りに五寸釘ですることもある。

2　ペチャ（紙面子）

直径約六糎の円形の厚紙にきれいな絵を印刷した薄い紙をはりつけてある。男児の遊びで二人以上何人でもできる。ジャンケンで順番を決め、負けた者が先ずペチャを置くと順にペチャを叩きつけながら叩きつけた瞬間の風を利用して相手のペチャをひっくり返すとそのペチャが自分のものになる。これは相当の技術が必要である。これはかやし（返し）という遊びだがこの他に鉄砲庄屋、振り、すき（敷き）、ばらし（散し）など種々の遊び方がある。大正の末ごろまでは一銭で十枚ほど買えた。ペチャの絵は一種の流行があり、源平時代の武将、赤穂四十七士、乃木大将、正ちゃんとリス、のらくろなど当時の子どもの読物等から取材していた。このペチャも後には大型、中型とできて、大型のものは直径二十糎もありこれは競技よりも美しい絵を見るのが楽しみだった。絵の一隅に庄屋とか鉄砲とか狐とか書いてあり鉄砲庄屋という遊び方は狐拳のようにして遊ぶから賭博に類似するものだとか、負けて相手を怨む等の欠点があるとか、いや冬期のよい運動だと論議があったようだが、結局学校で遊ぶことは禁止された。

3　こま

これも男児の遊びで幼児用から学童用まで各種のこまがあった。秋の供日の市が尼寺や中極で立つとこま専門の店が何軒も立並び子どもたちはこまを買ってもらうことだけは忘れなかった。幼児はどんぐりごまやひきごまをただ回すだけで楽しんだ。かけごまだけは約二メートルの細い紡績糸を用いたが、その他のこまはわらや布・麻等で約一メートルの綱を作りこれを「よいそ」と呼びこれで回した。場所はお宮の堂や庭先の固い地面を選んだ。

●こまけり●けんこま

二人以上は何人でもよく、最初は「ぼうによってしょいのこま」と全員揃えて掛声をかけながら精一ぱい回し、長く回った者から一位、二位と順位を決める。「ぼうによっては」というのは「最初から」という意味で他の場合も使うがこれは「法によって」つまり「規則通りに」ということから起こったらしい。負けた者が先にこまを回わし（これを「もす」という）、次の者はこれにあてて回す。自分のこまを「よいそ」で助けながら相手のこまにぶっつけ合って倒し最後に残った者が一位になる。同時に倒れた場合はすばやくこまを回した方が勝者になる。自分のこまを回す時前者のこまに全然触れない場合は最下位になりその回だけは除外される。「こまけり」も「けんこま」も遊び方は変らないが、けんこまはこまの上部外側に鉄の輪をはめたこまを用いる。ぶっつけ合うと火花が散り、よく回る時はぶーんというなりを出す。足の方は「けん」と呼びこれも鉄で四角柱になっている。

●投げごま

ほうの木で作った上部が丸いこまで「坊主ごま」ともいう。これは思い切り相手のこまに投げつけて倒すもので危険性が伴う。「きせごま」という所もある。

●かけごま

直径十—十五糎くらいの大きい木製のこまで、けんは円柱になっている。利き手の人さし指の一節目に約二メートルの丈夫な紡績糸の端をくくりつけ、こまをぶら下げて巧みに回す相当高度な技術を要する遊びで競技ではなく技を楽しむものである。上手になると「大ぶり」や「綱渡り」「股くぐり」など色々な芸ができ大人でも結構楽めるものである。

4　うっつめ

男児の遊びで小鳥を捕る道具である。小鳥のよく来る藪や林の中の地面に仕掛けたり高い樹上に仕掛けることもある。弾力性に富んだ木や竹を二メートルくらいとって曲げてかずらなどで弓を作り、そのつるに小鳥をはさむ仕掛けをする。餌にはやぶこうじの実や野ぶどうなどをつける。

5　網わな（あいばな）

丈夫な約一メートルの木で弓を作り、つるの部分は縄とかかつらを用いた。このつるに網のついた竹輪をとり付け、つるに「より」をかけて小さな竹でこれを制止し、その竹先を粟に軽くさしこんでおく。小鳥が粟をつつくとその竹が外れて網が下りてきて小鳥をすっぽりかぶせてしまう。夕方仕掛けておい

て翌朝早く起きて見回りに行く。せっかく小鳥がかかっているのに百舌鳥に見付けられ、小鳥の頭だけ食われている時はがっかりしたものである。

6　鉄砲類（てっぽうという）

紙をつめるのは紙でっぽう、椋の実をつめるのは椋の実でっぽう、杉の実をつめるのが杉の実でっぽうで水をとばすのは水でっぽうとかみっちょこと呼んだ。椋の実はまだ青いのをとって弾にし、杉の実でっぽうは小さい杉の実をつめるので竹の節の長い美しい竹を選ぶのに苦心した。またフージ鉄砲は竹製だがこれはフージという火薬を買ってきて弾にしたものである。水でっぽうも水を押して筒の先からとばすものと柄の方からとばすものとがあった。

7　竹とんぼ（竹へんぼー）

肉の厚い竹を長さ十―十五糎、幅二―三糎くらいに切り両翼を飛行機のプロペラのように削り、中央に竹ひごを通し、両手ですばやく回転させてとばす。よく出来ると十五―二十五メートルは楽に飛ぶ。また直径二―三糎の竹筒を上下二段に分けて心棒を通し、上部の方に羽をはめこみ、下部を片手で握り上部を紐ですばやく回転させ羽だけをとばすもので三十メートルくらいはとぶものである。

8　のんま（写真後掲）

「乗り馬」か「野馬」か不明だがこれも男児に限られた遊びで室の内外でできる。十人以上くらいの比較的多人数の者が二手に分かれ、ジャンケンをして負けた方が馬を作り、勝った方が順々に助走して

バックとびの要領でとびのる。馬になる方は壁とか立木等を支えにして正面に股を開いて立ちその他の者は次々に頭を突込んで長い背中の橋を作る。乗り手の方は全員が失敗なく乗らなければ負けで交代する。また、乗る時に馬の方がこわれたらやり直しをする。無事に乗ってしまったら先頭乗者と馬の方の立っている者とでジャンケンをして乗る方を決定する。

9　けんま（写真後掲）

男児の冬の戸外遊戯で普通五―六人でする。ジャンケンでいちばん負けた者が馬になり次の順の者の腋下に首を突込み背を丸くする。他の者は走って来て隙を見てとび乗るが乗る時馬に蹴られるとその人が馬になり、また乗っていても馬から振り落さるれば馬にならねばならない。馬になる者が出ると立っている人が乗手に代る。これは勇壮ではあるが危険を伴うので学校は禁止していた。

10　石どり

これは男女共通の遊びである。ラムネの玉くらいの石ころを七個集め木陰などを選んで地面でしたり屋内でもした。この遊びは「いっきょどり」と呼び二人以上何人でも遊べる。ジャンケンで先行を決めるか「のせうけそらまねき」といいながら七個の石を手のひらの甲の方に乗せ、それを上方へ飛ばしその石をつかんだ数の多い方から順位をつける。この遊び方は次のとおりである。

一回目……七個の石を全部ばらまき、親玉を一個取ってこの親玉を上方に上げながらそれが空中にいる間に下の石を一個ずつ「いっきょどり」といいながら取っていく。取った石は左手へ移す。六個全部を

取り終わったら「にんきょ」といいながら再び全部の石をばらまく。
二回目以後……二回目は同時に二個ずつ取り、三回目は三個ずつ、四回目は始め四個とり次に二個、五回目は五個と一個取る。
六回目……今度は六個を同時に取り、親玉を上にほうり上げてその間に六個の石を手のひらを伏せて一ところにおく。
七回目……親玉を手の甲で受け止めその石が落ちないようにして、中指と親指であとの六個の石を一個ずつつまんで甲に乗せた石をとばしながら次々とのせかえていく。最後に残った石を招きとると一かんの終わりとなる。
この遊戯はいくらかの規則があり規則違反や途中で失敗したらそこで止め、相手が失敗するまで待ち失敗した回のところから続ける。

11　瓦あて（写真後掲）

男女共通の遊びで二人以上が二手に分かれる。各人は手のひら大の三角形や四角形の瓦かけを持ち寄り、四—五メートル離れて線を引き各自の瓦を立てる。ジャンケンで先行を決め相手の瓦にあてて倒した方が勝ちになるが、その倒し方がいろいろ工夫されている。最初は手でほうり投げて倒す。次は足で自分の瓦をつけて三回以内で相手を倒す。次々に頭上、肩、腰、背中、腋下等に自分の瓦をのせたりはさんだりして相手の瓦の所まで行き、落しながら相手を倒す。一回ごとに交代して倒した数の合計で勝

負を決めたり、一チームの者が全部相手を倒すと次へ進むとかいろいろの方法がある。

12　おはじき陣取り（写真後掲）

主として女児の遊びである。二人から三人くらいでし、直径一メートルくらいの円を地面にかき網の目のように小さな枠を作る。ジャンケンをして先行を決め、小さな石ころかおはじき玉を一目ずつ入れて行き、入ったところの網の目を消して行って陣地として行く。それぞれの陣地が決ったらジャンケンを一回ごとにして勝った方が自分の手のひらを一ぱいに広げて円をかき相手の陣地から取っていく。陣地の早くなくなった方が負けである。

13　とんぱた＝段々とび（写真後掲）

男女共通の遊びで二人以上四—五人でする。適当な広場を選んで直径七十—八十糎の輪を六つくらいとその両端に方形のものをつける。手前の方形の所に瓦片を置き自分の玉とする。ジャンケンで先行を決め玉を手前の輪から入れ、玉がうまくは入ったら、玉の入っている輪はとびこえ○の所は片足①の所は両足をつき向こう側の方形の所まで行ったら戻り、その時自分の玉を取り次の輪の中へ投げ入れる。玉が輪の中へ入らなかったり、線を足で踏んだり、回転する時足の位置を動かしたりすると反則になり次の順番を待つ。向こう側の方形の中まで入れてしまうと片足とびをし、曲げた方の膝下に玉をはさんで図形を一周し手前の方形の中に落し入れ、うまく入ったら「一かん」といい、一ゲームの終了となる。輪の中に連続して玉が入っている場合はそれだけとび越えねばならないので運動量は大きい。

14　月取り

長さ二十糎、幅一糎くらいの竹の札を作り、竹の裏側へ一月から十二月まで書く。ジャンケンで先行を決め、十二本の札を握って手の甲の方に振り乗せ、一本ずつ静かに下して行くが、下した時必らず字を書いた方が上にならねばならない。もしそうでない場合は次の者と交代する。取り終わった月の数字の合計の多い者から順位をつけたり、五回十回と連続して最後に合計を出す方法もある。男女共通の遊びで二―三人くらいで室内とか木陰の遊びである。

15　うず巻遊び（写真後掲）

男女共通の遊びで四人以上の偶数人員が二手に分かれて遊ぶ。地面に大きな渦を書き、渦の内側と外側に位置し、最初の人が用意ドンで走り出し途中出会った所でジャンケンをする。勝てばそのまま進んで行き、負けた方は次の走者がすぐ走ってきて相手が近付いてくるのをくい止める。出合った所でまたジャンケンをしこれを繰返しながらチーム全員が相手側へ早く行ってしまった方が勝ちになる。

16　つばめおこし

春になって草が芽を出すがかや類の若芽は内部に柔かい白い穂を抱いている。これを「つばめ」という。これは食べられる。これが少し成長すると赤みがかりこれは「やこつばめ」といってもう食べられない。このつばめを摘んできて、その中の三本を指でつまみ回転させながら三角形を作る。その三角形の中へ自分が持っているつばめを触れないように手で立て、成功したらそれを数えてその本数だけ相手

からもらう。交互に行うが三角形を作りきらないと相手と代る。三角形を大きく作らねば勝てない。

17　こっくいさん

洋紙一枚にいろは四十八文字と濁音、半濁音の表、それにゼロから九までの数字表を用意する。外に白木の箸を三本用意してその上部を括って三方に広がるようにしておく。用意ができると仲間の一人が三本の箸を持って玄関口へ行き「こっくいさん、こっくいさん、どうぞからわれてください（おんぶされてください）」といってその箸を背中に乗せてくる。座敷へ来たら誰かがその箸の二本を握り一本を立つように持つ。これから仲間の者がいろんな質問をすると箸が文字の上を指して行きながら答える。これはこっくいさんという霊がそうさせるといわれ気味の悪い遊びであった。

18　魚捕り

普通そうけ（ざる）とか網を持って川魚を捕りに行く。「どじょうぞうけ」は一斗ぞうけを二個分つないだくらいの大きさで中央に竹の握り手がついており、どじょうは捉えにくいので片方に落し口をあけて作ったものもあった。「うけ」は一―一・五メートルくらいの川幅の所で梅雨のころ魚が川をさかのぼるのを利用して捕るもので一度入ったら出られない仕掛けに作る。どじょうはどじょう専門のうけで直径十糎、長さ五十糎くらいで水田のじゃこ（うねでない所）などにつけた。その他どんこ釣り、はや釣り、鮒釣り等いろいろあるが供日ごろになると、水田の小さな灌漑用水路も水がかれるので、そんな所は「ねーぼい」といって川底にもぐっているどじょうを手で掘ってとった。「つけ針」は約二メートルの

糸先に針をつけ、それにどじょうを輪切りにしたものとか、たにしの軟体部などを餌にして夕方川の中に流しておく。勿論糸の他の方は竹の串に括りつけ川岸へさし目印しをつけておき翌朝早く上げに行く。うなぎやなまず等の大物がかかる。「さし針」は約一メートルの小竹の先にみみずをつけた針をつけて竹の先端に引掛け、石垣の間にさし込む。うなぎ等がおればかみつくので、静かに竹を外し紐を引っ張って釣り上げる。その他堀干しは四、五人で共同し水を干して魚をとり後で分ける。また、ざるの口の方を布で覆い少し穴をあけて中にみそなどを入れてはやをとった。大正のころにははやとりびんというガラス製のものができた。この外、夜ぼいといってあき罐などの中にろーそくを立てそれで川を照らして岸辺に眠っている魚を捕えたり、「おんつき」といって二メートルくらいの竹の先に五、六本の鋭い針金（こうむり傘の骨をよく利用）を取付けて魚を突きさして捕るのである。

19　せみ・とんぼとり

今のように昆虫網などが一般に普及していない時代の子どもたちは、せみもとんぼもくもの巣でとった。長い竹竿の先に小さい竹で楕円形になるようにはめこみそれにくもの巣をまきつけた。くもの巣も始めの方は木の葉などにはっているあまりべたつかないのを張り、その後にこの辺でいう「きんこぶ」（女郎ぐも）という粘性の強いものをはりつけた。

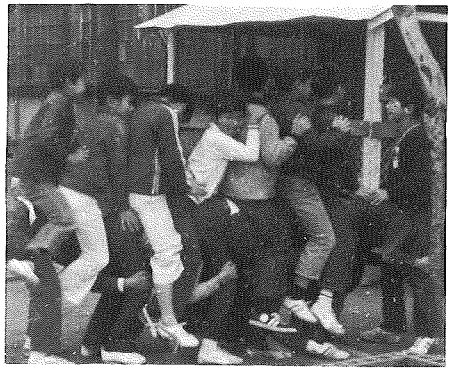
20　その他

「たこあげ」のたこのことを「とうばた」という。お正月でなく夏から秋にかけて揚げた。昭和の始

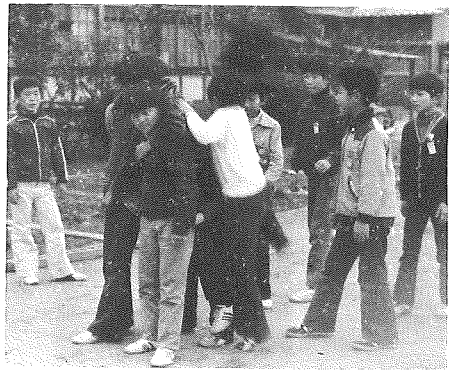
めごろは大人もこのとうばたをあげ「ちゃんかけ」といって相手のたこの糸にからませて切ってしまう遊びが流行し、後にはこの糸にガラス粉を塗って相手の糸を切り易くしていたものもあった。

今のソフトボールに似た遊びで、ルールはほとんど変わらないが、ボールは普通のゴムまりを使い、手のひらで打った。その他竹馬乗り、陣取り、輪回わし、へっちんもっこ、詰将棋、縄とび、栗拾い、きのことり、させびとり、野苺とり、わらびかぎ、ゴム銃、いろはカルタ、双六、ラムネ玉あて、あやとり等、季節、年令、性別、人数、天候、場所等に応じ多種多様の遊びがあった。そしてこれらの遊びがよく自然と融合し、多くの友人を作り、故郷を出ても故郷とのつながりを持っていたようである。

うず巻き遊び（再現、以下同じ）



のんま



けんま

瓦あて

おはじき陣取り

とんぱた

七　生活さまざま

1　農村点描

大和町の農業といえば米麦が中心であったが、昭和三十五年、六年ごろから全国的に学校給食が始まるとともに、一般の間でもパン食の増加その他食生活の改善等により、米が年々余剰を生じ、昭和四十五年にはついに米作地の一割減反等米作りが制限されるようになり「休耕田」という新事態が発生し、麦は採算が取れぬということであまり作られず、また農業の機械化、農業技術の改善、農薬の進歩普及等により次第に大型化の傾向となり、ビニールハウス等による促成栽培、果樹、酪農等の多角経営に変わりつつある。

大和町は地形が南北に長く、北部の山地、中部の山麓地帯、南部の平地に大別されるが、各地帯それぞれの特性を生かした農業が見られるのである。農業そのものについては産業篇に譲ることにして、ここでは民俗的な立場から大正・昭和の初期ごろまでの農村生活を対称として述べることにする。

(1)　株切り

明治の十代の中ごろ、螟(めい)虫の駆除法としては稲株(いなかぶ)の堀り取りと焼却処分、苗代(なわしろ)による卵の採集、誘蛾(が)灯による誘殺であった。大和町は大部分が二毛作であった。十月の終わりごろから十一月にかけて